中山　農

設計演習Ⅰ

第１課題
アーバン・インテリア
―内部から都市を読む―

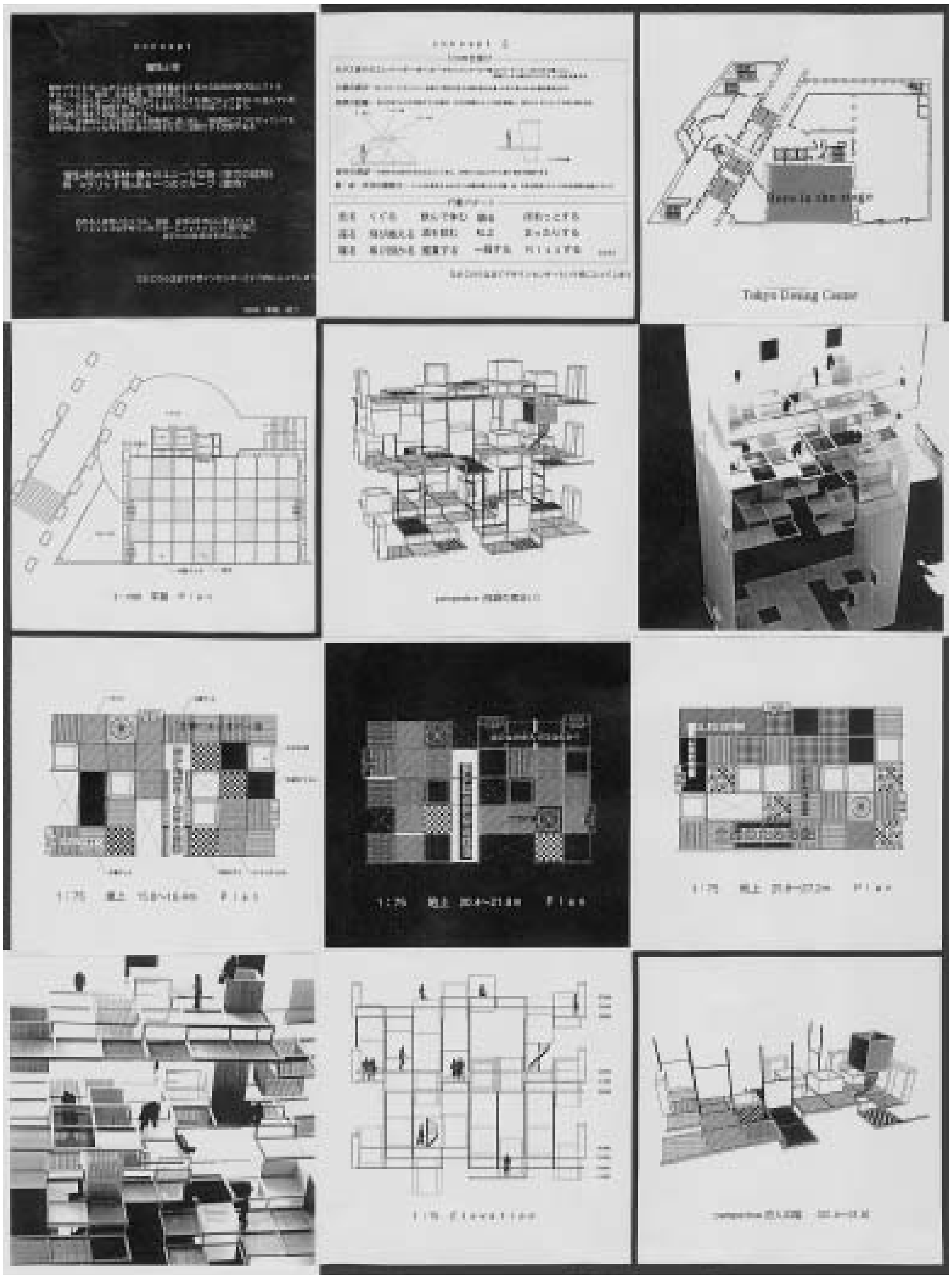
第２課題
アーバン・インテリア
―都市を内部から考える―

３年１組

担当＝
川口　とし子

第１課題
中山　農
大切だと感じたものはすぐに手にいれるか経験するかしないと、一晩か二晩で平凡なものに変質してしまう。みんなそのことをよく知っている。プラダのチェーンバッグを買うためにマクドナルドで半年バイトする女子高生はいない。
村上　龍　『ラブ＆ポップ』

指導＝川口　とし子
何時からか若者達が競争社会の餌食になっている……そんな懸念が、逆に彼等と積極的に学びを共有したいというデザインすることの本質的な意味へと導いたように思われる。振返ると、課題提出日に受講者約20名に出されたアンケートの中の一つ「日本で最も興味ある場所は？」の問に起因する。回答の１位は「京都」の５名、そして２位が



布施　裕二

「東京」の4名であった（……「世界で最も興味ある場所は？」の問に「日本」との回答は皆無……）。若者達の関心の中で東京は明らかに日本を超える存在となっている。そしてその東京さえもが情報過多と不透明な未来という逆説を抱え込み、ポテンシャルを急落しているのがこの数ヶ月である。いずれにせよこの東京という都市を読み解こうとすることはデザインという創造的過程の一通過点に過ぎないのかもしれない。しかし日々対峙する都市を読むという反復こそが、新しいデザインを生む収束力をもたらす。この様な潜在的傾向を特徴としたこの度の設計演習で、最も「都市」と「インテリア」を読むことに洞察を深めていると高く評価できるのが中山案であった。〈アーバン・インテリア―内部から都市を読む―〉という奇妙なテーマと南青山の過度にソフィストケートされた課題空間。にもかかわらず、手探りで見付けたキーワード「瞬間」「透明」「方向」「色」を口ずさみながら危うい程に不透明なデザイン・プロセスへと最初の一歩を踏出している。

第2課題
布施　裕二

今回のインテリアという課題を内部を中心に外部へ空間化することと理解した。五反田の都市像を自分なりに噛み砕き、凝縮させそこから逆に外へ解放している。
ここは都市に対して開かれた日常空間の延長で使い方を強制されない半屋外公園で、さらに室内をフィルターとして外を感じられる。
一方これらは外からは舞台となり自己表現の場となる。
これらの見る・見られるの関係を意識してデザインした。

指導＝川口　とし子

第1課題提出時のアンケートで一番人気であった「京都」が庭や小道で、また古都「奈良」こそは建築物によって特徴づけられるとすれば、さしずめ「東京」はインテリアということにでもなろうか……。東京における建築の過密化はその個別性を雲散霧消し、連続体としてのオーバーオールの被膜性を強化する。そこで建築は衣服化、皮膚化し、インテリアライズされる。さらに都市は人間・情報・物質・エネルギーのたえざる流入と消費（散逸）、および人間・情報・物などの非線形な相互作用によって維持される。それは開放系としてのみ存在しうるライブ・ネットとオートノミーを強化していく。そのような状況下でトップ・ダウン的な単純化に繋がる建築的施設より、ボトム・アップ的な複雑化としてのインテリアの連鎖の方が有効であるのかもしれない。都市を理解するために、いったん都市をカッコに入れる……複雑なものを複雑なままに見る糸口を発見することが第2課題の隠れたテーマであったとも言える。その出題時より、自由度の高いアプローチを望んで取組み続けていた布施案が、最終的に最も魅力的な作品の一つとなったことはじつに嬉しい。「個性」と「枠」という自分の言葉でコンセプトを組立てようとする姿勢、「飲んだ後の一休みの段差」といったヒトとスペースのチャンネルの実感。デザイン・ワークは競争社会の義務感や欲求からでなく「己の力で回る車輪（ニーチェ）」の推進力こそが源である。